

2026年5月3日 第二礼拝

説教題『責められることのない良心』使徒言行録24章1～16節

主任牧師 加藤 誠

「こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。」(使徒言行録24章16節)

今朝の使徒 24 章は、パウロがローマ総督フェリクスの裁判を受ける場面です。この場面でまず思われることは、神がローマ帝国の時代に独り子イエスを赤ん坊として送られた、その深い御計画の不思議です。パウロを訴えるためにユダヤ教指導者たちは弁護士テルティオを連れてきていますが、二千年前のローマ時代に、原告と被告とにそれぞれ弁明と取り調べの機会が与えられる、現代の裁判の原型が出来上がっていたことに驚かされます。ですからパウロの弁明の言葉もきちんと記録されました。主イエスが生まれたユダヤがローマ植民地であったことで、パウロたちは当時の世界の共通語（ギリシャ語）で主イエスの福音を世界中の人に紹介することができました。もしユダヤがローマの植民地でなかったら、弟子たちが語るユダヤのヘブライ語では世界に福音が伝わるのは難しかったことでしょう。ローマ帝国が地中海全域を統治していたゆえに、パウロは自由に旅をして、町々に福音を届けることができました。そしてパウロはローマ市民だったゆえに、幾度とない迫害と妨害の中でも身の安全が守られてパウロは福音を語り続けることができたのでした。神がローマ帝国の時代を選ばれて主イエスを送られた、その御計画はなんと不思議で深いものであったことか。私たちは、神の御計画、御心を前もって知ることはできません。しかしあとで後ろを振り返った時に「そうだったのか!」と、神の御計画（御心）が一筋の道となって見えてくる。御心は私たちの「前」ではなく「後」に見えてくるものなのです。

またもう一つ、この裁判で思われることは、パウロのアクの強い個性を用いられる主の不思議です。先日の朝の祈祷会で同じ個所を分かち合った時に「パウロは苦手」「パウロはあまり好きではない」という正直な声が語られていました。確かにパウロは自信家でおしゃべりで、攻撃的で理屈っぽい、とてもアクの強い人物です。実際、敵も多かったですし、同じキリスト教徒からも距離を置かれている部分がありました。この裁判の場面でも、主イエスが黙って不条理な十字架を受け入れていかれた姿と比べると、雄弁すぎるくらいのパウロがいます。そういう実にアクの強いパウロが、しかし異邦人伝道という働きでは大いに用いられていくのです。ギリシャ語が堪能だったパウロだから、異邦人たちの前でも、ローマ総督の前でも、臆することなく主イエスを語っています。ローマ市民という特権のゆえに、幾度もの暗殺計画から守られてローマ皇帝のいるローマまで福音を届けていく大切な役割を担ったのでした。神は、主イエスは主イエスとして、パウロはパウロとして御自身の計画の中でお用になら

れる。そして主イエスとパウロは、それぞれ、自分を召された神に最後まですべてをささげて尽くして歩んだのでした。ですからこの場面でも、総督フェリクスの前に主の証し人としてパウロを立てている神の働きの不思議にまず目を注ぎたいのです。

さて、裁判ではふつう被告の罪が問われ裁かれますが、パウロの裁判を見ていると裁かれているのは実は権力者たちのように思えてきます。パウロが「神にも人にも責められることのない良心に努めてきた」と堂々と語るのに対して、大祭司や総督たちは「わたしもそうだ！」と胸を張ることができません。神や人の前に明らかにできないものを抱えていたからでしょう。例えばフェリクスは、このあとパウロに関心を寄せますが、パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと「恐ろしく」なり、パウロを遠ざけたと書かれています（24 章後半参照）。フェリクスにとってパウロの言葉は自分を裁く神の言葉として聞こえたのでしょうか。権力者たちは人々を前に偉そうに立てても、神の前に顔をあげて立つことはできなかったのです。

では、パウロが語る「責められることのない良心」とはどういうものでしょうか。例えば第一ペトロはこう語っています。「洗礼（バプテスマ）は肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願い求めることです」（3・21）。私たちはバプテスマを受けてクリスチャンになることで、罪と無縁になるわけではありません。肉体を生きる以上「罪なき者、汚れなき者」にはなりきれません。パウロも自分のことを「自分の望む善は行わず、望まない悪を行ってしまう。なんと惨めな人間だろう」（ローマ 7：13 以下）と語り、「キリスト・イエスは、罪人を救うために世にいられたと言う言葉は真実であり…わたしは、その罪人の中で最たる者です」（第一テモテ 1：15）とも語っています。つまりパウロが「神にも人にも責められることのない良心を保つように努めてきた」という時、彼は「自分は罪や汚れと無縁の清らかな人間だ！」と胸を張っているのではないのです。そうではなく「罪や汚れに生きている私を、それでも赦し、救われるキリスト・イエスによって、自分はここに立っている」ということを誰よりも知っているのがパウロであり、「そのようなわたしに正しい良心を示し、正しい良心を生きる力を与えてくださいと神に祈り願いながら、今日もここに立っているのです」と、パウロはここで語ったのでした。

バプテスマは、神の前に自分の弱さ、愚かさ、罪深さを認めることです。キリスト者として生きるとは、バプテスマを受けても相変わらず罪を抱えている自分だけれども、それでも愛してくださる主イエスにこの世界を生きる正しい良心を願い求め続け、「あなたの弟子として共に歩ませてください」とつながっていくことです。私たちがたとえ手を離してしまうことがあっても、主イエスの方では絶対に手を離さない。その方の愛にしっかりつなげられて、正しい良心を求め続けていきましょう。その良心を具体的に指し示しているローマ 12 章 9 節以下を最後に読みましょう。